

# スタンダード研究会会報

**( 2005 ) No. 15**

2005 05. 28

## 目 次

研究会発表要旨	
・ Stendhal et Claude Fauriel ( 粕谷 祐己 )	… 1
・ 「『赤と黒』第 1 部・第 18 章の制作をめぐる」( 高木 信宏 )	… 2
・ Stendhal et Mme de Duras ( 下川 茂 )	… 4
・ スタンダールと山 ( 角津 美愛 )	… 6
書評	… 7
クロック報告	… 16
セミナー報告	… 19
会員活動報告	… 20
会員名簿	… 21
後記	… 23

## 【研究発表要旨】

第 40 回 ( 2004 年 5 月 於 白百合女子大学 )

### Claude Fauriel et Stendhal

粕谷 祐己

『恋愛論』におさめられたいくつかのアラビアの逸話をスタンダールに提供したのは碩学クロード・フォーリエル ( 1772-1844 ) である。フォーリエルは、サント＝ブーヴが「十九世紀の全ての avenues の起点」と呼んだほど当時の知識人層に多大な影響を与えた人物であるが、その軌跡は現在ほとんど知られていない。そこで彼に捧げられた数少ないモノグラフィーのひとつ、Dawlat Lewis の博士論文 *Claude Fauriel, l'homme et l'œuvre* (1972) を参考にその業績を確認し、あわせて彼とスタンダールの交流をあとづけてみた。

フォーリエルはなによりも語学の天才と言うべきであろう。革命から帝政、王政復古と激動する時代に、財産もなく生活基盤も安定していなかったフォーリエルが非常に多くの言語を、いずれも第一級の専門家と評価されるまでマスターし得たことは驚嘆に値する。もっとも彼の生きた時代が、フランス自体が世界のさまざまな文化を対象にした学術研究を本格的に始めた時期であったことも大きい。その語学力を駆使して彼はギリシャ、南仏、ドイツ、イタリア、アラブ、インド等々の文学研究、紹介に最高レベルの業績をあげ、権威として信頼された。彼の知人関係をたどれば、そのまま当時の全欧知識人のリストができあがるほどである。

スタンダールがミラノからパリに帰還した 1821 年当時、フォーリエルは彼にとって最も近い人物のひとりであった。スタンダールはその博識と控えめで高潔な人格を高く評価していた。その後両者が疎遠になった最大の原因はメリー・クラーク嬢のスタンダールに対する不興であったようだ。20 年にわたって交際を続けたコンドルセ未亡人の死後、フォーリエルはクラーク嬢と愛人関係になっていた。

それにしても後にフォーリエルの書いた *Vie de Dante* の文体をスタンダールが “exemple de la bassesse bourgeoise” と評しているのには腑に落ちないところがある。『ロッシェニ伝』ではフォーリエルのマンゾーニ作品翻訳の文体に大きな贅辞を捧げているのに。個人的感情がスタンダールの目を曇らせているのでないとするならば、スタンダールの “bourgeois” 概念の本質をその文体の中に見いださう、ということもかもしれない。

## 『赤と黒』第 1 部・第 18 章の制作をめぐる

高木 信宏

周知のように、『赤と黒』第 1 部・第 18 章には 2 つの着想源があったことが、従来の研究によって明らかになっている。まず章の前段をなす、ヴェリエールへの某国王の行幸という主題にかんしては、1829 年 10 月末のナポリ国王によるグルノーブル行幸が源泉であると見なされている。いっぽう章の中段以降の展開を統べる、聖クレマンの聖遺物崇拝については、1830 年 4 月末にパリで催された聖ヴァンサン・ド・ポールの聖遺物祭典がその材源であるとほぼ特定されている。しかしながらスタンダールがいつ、どのようにして時期の異なる 2 つの源泉を接合し、章全体を作りあげたのかという問題は、これまで手つかずのままになっていた。本発表では、祭典をめぐる新聞報道や同時代の政治的・社会的状況、小説の印刷工程などの具体的な検証をつうじて、第 18 章制作の実態について一つの仮説を提出した。

以下、その要点だけを記すと まず我々が注目したのが、第 2 の源泉の報道時期が『赤と黒』第 1 部の原稿提出後であったという点である。というのも、この事実によりスタンダールが第 18 章の修正を校正作業中におこなったのは明白だからだ。シャルル 10 世の聖遺物崇拝を報じる新聞記事をもとに第 1 部・第 5 章が修正されたこと、第 18 章の聖遺物崇拝の主題もまた同報道から着想されたことなど、クロード・リプランディの解明によっていまや疑いのないところである。すなわち記事の日付以降 ( 1830 年 5 月 1 日ないしは 2 日 ) に、同章の修正のほうも具体化していったと推測できるのである。

さらに、その時期を絞り込むうえで手がかりとなるのが、『赤と黒』の校正方法である。すくなくとも同作のばあい、スタンダールの備忘等から推定される校正の工程とは、頁割のされた本組校正刷を用いた著者校正、つまり著者が初校をもって校了とするというやり方である。とうぜん折丁順に校正していくため、大きな修正があるばあい、あらかじめ当該校正刷の出来前に印刷所へ修正原稿を送付しておく必要がある ( もっともこれは当時の校正工程としては一般的な部類に入り、校正を度重ねて推敲するバルザックの方法のほうが異例であった )。したがって校正刷にかんする備忘の記述から、第 18 章の修正時期についておよその見当をつけることが可能となる。同年 5 月 25 日付の備忘から判断すると、この日よりも以前に修正原稿はほぼ出来上がっていたと考えられるのである。

ただし、手がかりはそれだけではない。『赤と黒』は着想の点では様々な次元で同時代の新聞に負うところが多いが、同様に第 18 章成立の背景にもこれまで未確認だ

った新聞報道が存在するように思われる。それは王太子のグルノーブル行啓を報じる5月16日付「モニトゥール」紙の記事である。この行啓は軍港トゥーロンでのアルジェリア遠征軍激励の一環をなし、各地での王太子奉迎の様子が王党派の新聞各紙によって伝えられているように、巡幸そのものが世間の耳目を引いていた。5月2日付「ガゼット・ド・フランス」紙第3面には王太子奉迎のためにグルノーブルで騎馬護衛隊を組織する許可が下りた旨の通信が掲載されているが、注目すべきことに第1面では前述した国王による聖遺物崇拝が報じられているのである。つまり2日付けの同紙には第18章の2つの主題が同居しているのだ。だが、16日付「モニトゥール」紙の内容もそれに劣らず重要である。こちらのほうでは奉迎の様状につづいて、王太子が当地の大聖堂を訪問したことが記されているばかりか、司教による奉迎の辞と王太子の返答なども併せて活字にされており、スタンダールが特別な関心を寄せるのに十分な内容となっているのだ。この記事が契機となって作家が第18章の修正に着手したのであれば、第18章が成立したのは5月16日から25日にかけての期間であったと推測できるのである。

最後に、以上の推論からさらに導き出されることをごく簡略に付言して本発表を締めくくった。我々の考えでは、スタンダールは『赤と黒』第1部の校正作業中に、第1部・第5章、第18章、第28章という順で修正を施している。しかも興味深いのは、いずれの修正においても彼が「聖堂」という舞台を導入し、重要な役割をあたえている点である。つまり作家は「聖堂」という主題を想像的イマジネーションの核にしてそれら一連の修正をおこなったと考えられるのだ。このことから、5月初めの聖遺物関連報道が着想源としていかに重要であったのかがあらためて窺い知れよう。また、同記事には「深紅 *cramoisi*」という色が登場するが、上記3章の修正においても、同色ないしは同系色の配備にあたってはそれらに暗示的な機能が付与されている点から、5月初旬におこなわれた『赤と黒』という題名の変更にも同記事が深く関与した蓋然性はきわめて大きいと思われる。

付記：本発表は九州大学フランス語フランス文学研究会『ステラ』第23号に掲載された拙論「『赤と黒』における「聖堂」第1部・第18章の制作をめぐる」にもとづく。同拙論は九州大学仏文学研究室のホームページ上でPDFファイルにて公開中 (<http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/french/>)

## Stendhal et Mme de Duras : le jacobinisme rousseauiste dans *Armance*

下川 茂

スタンダールの *Armance* とデュラス夫人の *Olivier* との関連は、長年未刊だった夫人の *Olivier ou le secret* が 1971 年に José Corti から公刊されたことで、具体的に明らかになった。しかし、Corti 版の編集者 Denise Virieux の序文と注以上に詳しく両者の関係を解明した研究はまだ出ていないようである。Virieux の研究をふまえ、さらに夫人の他の作品 *Ourika* と *Édouard* も視野に入れながら、スタンダールと夫人の関係を追及するのが本発表の目的である。*Édouard* と *Armance* の関連については、Virieux 以前に松原雅典氏が触れているが（『『アルマンス』の成立』、『金沢大学教養部論集 人文科学篇』(3)、1967 年（『スタンダールの小説世界』みすず書房、1999 年、73-112 頁）、ここでは氏とは違う観点から二作品の関係をとり上げる。なお、*Édouard* と *Le Rouge et le Noir* については幾つかすでに研究が存在する（F. Vermale, *Stendhal et la duchesse de Duras*, in *Ausonia*, janvier-septembre, 1942 ; H.-F. Imbert, *Les métamorphoses de la liberté*, José Corti, 1967, p.545-546 ; Richard Bolster, *Stendhal, Mme de Duras et la tradition sentimentale*, *Studi francesi*, 1992, p.301-306）。

さて本発表では *Armance* と *Olivier* に共通する二つのテーマに焦点を絞る。一つは、「この世で不幸だった恋人達が死後に再会する」というテーマである。「無垢な生の後で、同じ棺が我々二人を結びつけるでしょう」とオリヴィエは恋人ルイーズに語る。*Armance* では、本文中ではなく、最終章（第 31 章）のエピグラフに、「もし彼が死ぬのなら、せめて一度だけ心からのキスをさせてほしい、そして私たち二人をを一つの棺に入れて下さい」と、このテーマが現われる。*Armance* でも *Olivier* でも、恋人達が同じ墓に葬られたかどうかは明らかではないが、*Édouard* では実際に恋人達が死後同じ墓に葬られる。明らかにスタンダールはデュラス夫人が明示したテーマに心を惹かれたのだが、主人公を修道僧志望から 18 世紀的な無神論者に転向させていたため、本文でそれを明示せず、エピグラフで暗示するにとどめた。しかし、オクターヴは、死を迎えた船上で、「臨終の祈り」を頼み、「イタリア人の船員」が彼の傍らでそれを唱える。無神論者に相応しくない行為だが、*Le Rouge et le Noir* でも、神を信じていなかった筈のジュリアンが、獄中ではジャンセニストの告解師を選び、さらに死後の感覚の存在を否定せず、レナール夫人の財布が埋められた山の洞窟に葬られることを望む。一度は修道院に隠棲することを望んだオクターヴは、来世でクレリアと再会することを信じる *La Chartreuse de Parme* のファブリスをはるかに予言している。

もう一つは「知的・感情的エリートが社会に迫害される」というテーマである。*Armance* においてこのテーマはスタンダールのどの小説よりも極端な形で現われる。

オクターヴの決闘の後、つかのまの幸福な日々を過ごす恋人達について、作者は「しかし彼らは上流社会で暮らしていた。(・・・・)彼らは一緒に暮らし、不用心きわまることに、二人が幸福であることを人々は見抜くことができた。しかも、彼らは社交界のことなどほとんど念頭にない様子をしていた。社交界は復讐するに違いなかった Elle devait se venger」と語る。デュラス夫人の *Olivier* には、これほど過激な表現はないが、*Ourika* によく似た言い回しがみつかる。「ウーリカはその許しを得ずに社交界に入り込んだ。社交界は復讐するだろう la société se vengera」。黒人出身のウーリカはフランスの上流社会の敵意にさらされ、孤独に苦しむ。しかし、デュラス夫人の作品では、社会の敵意は主人公の心の中に内面化され、それが作品の悲劇的な結末を導く。ところが、*Armançe* においては、社会の復讐は、スービラーヌとボニヴェ騎士の偽手紙という形で実現する。手垢にまみれた小説の常套手段にスタンダールが頼ったと Virieux は批判しているが、常套手段の背後にあるものをみるべきである。それは、主人公や語り手のルソー批判にもかかわらず、執拗に作者スタンダールを捉えて離さない、ルソー的な迫害妄想的社会観である。デュラス夫人もルソーの図式の影響を受けているが、社会の敵意を二人の悪人の悪事に具体化するスタンダールの方が、その病は深い。社会の敵意を個人が内面化することさえスタンダールは許さないのだから。この個人と社会の絶対的な対立にはスタンダールの政治的立場も関係している。

旧体制を舞台にし、主人公の不能をテーマにした *Olivier* では、政治が取り上げられることはないが、*Ourika* には恐怖政治の時代が含まれており、主人公の保護者はロベスピエールの死後監視を解かれる。そして、主人公の革命に対する態度は、希望から幻滅へと変化する。また、旧体制を舞台としながら、貴族の平民差別を主題とする *Édouard* では、イギリスが主人公の理想の社会とされている。いずれも、ジロンド派の父をギロチンで失った作者デュラス夫人の穏健なりベラリズムを反映したものである。それに対してスタンダールは、*Armançe* において、自己のジャコバン的立場を明らかにしている。王政復古下の貴族のエネルギー欠如とブルジョワ化を批判するオクターヴを、アルマンスは「ジャコバン主義にごく近い」とする。そして、一度だけ悪役スービラーヌが口にするロベスピエールの名は、*Ourika* に示されたデュラス夫人のりベラリズムに対抗するものであろう。革命に関連して、もう一つスタンダールが夫人への暗示を行っている個所がある。アルマンスが自分の婚約者だとオクターヴに思わせようとするリセ男爵は、元ヴァンデ党の首領の一人で、『ロシュジャ克蘭夫人の回想録』に嫉妬している。ところで、デュラス夫人の長女 Félicie は 1819 年にロシュジャ克蘭兄弟の一人と再婚しており、夫人は娘の過激王党派との結婚に反対だった。これもまた夫人のりベラリズムを揶揄するものであろう。

さらに、*Armançe* におけるスタンダールのジャコバン主義は、王政復古下のブルジョワのそれとは異なる面をもっている。アルマンスとオクターヴは貴族批判という点でブルジョワと一致するが、ブルジョワの金銭崇拜、称号崇拜、マナーの悪さを非難する。それは、二人の貴族的立場からなされており、そこに作者の貴族趣味の現われ

を見ることができ、実はジャコバン主義とも矛盾しない。なぜなら、スタンダールはロベスピエールの無私と廉潔を高く評価しており、ロベスピエールのなジャコバン主義は、ブルジョワのそれらの悪徳を厳しく批判するものだからである。革命後も鬘と髪粉を使い続けたロベスピエールの貴族的な上品さも周知の事実である。こうして、無私で廉潔でかつ上品なスタンダールのロベスピエールのなジャコバン主義は、王政復古下のブルジョワ化した貴族と貴族化したブルジョワの双方と対立する。旧体制下でもっぱら貴族社会を相手に生活し、陰謀と迫害妄想の対象も限られていたルソーと比べて、ルソー主義を継いだロベスピエールとスタンダールのジャコバン主義は、その範囲を、全社会にまで拡大した。デュラス夫人の作品でも、主人公と社会は対立し結末は悲劇的だが、その社会観は妄想的ではない。革命に批判的なだけ、彼女はルソー主義から覚めていた。スタンダールは、オクターヴとアルマンズの幸福は、「貧しく誰ともつきあわない家族の中」なら可能だったとしているが、そんな家族は現実にはありえない。 *Armançe* はスタンダールのルソー的ジャコバン主義が最も露骨な形で現われた小説である。

## スタンダールと山

角津 美愛

風景を捉える感性の歴史において、18世紀末から19世紀に大きな変化が見られる。人々は人間の力を超えた自然宇宙の突発的な現象に畏怖や恐怖を感じ、それを崇高「sublime」と捉えた。また同時に人々は自然が人間の内面にもたらす動きも目を向けるようになっていった。特にロマン主義と呼ばれる時代において、風景は詩人や画家、作家らの内面と結びつく存在として作品の対象となった。中でも、最もその捉え方が変化したものは山の風景である。山は長い間、悪魔の住む場所という見方をされていたが、この時代では戦慄を覚えさえる甘美な怪異な風景と思われるようになった。この時代において山は崇高な風景と捉えられていた。研究会では、まさにこの時代に、そしてグルノーブルという山岳地方に生まれ育ったスタンダールが、どのように山を捉えているのか、またその個人的な解釈が彼の作品、特に『赤と黒』にどのように反映しているのかを考察した。

「パリの料理は山の無いことと殆ど同じ位に、そして明らかにそれと同じ理由から、私に不愉快だった」とまで述べているように、山はスタンダールにとって非常に重要な要素であると言えるだろう。彼は故郷の山をとっても愛していた。その根底にあるのは、スタンダールが幼少年期に感じていた束縛や抑圧の反動とも言える自由への欲望と憧れである。この束縛や抑圧こそが彼の目を風景へと向かわせ、山や自然を愛するように導いたものと考えられる。父や叔母らに行動を束縛されていたと感じていたス



スタンダールにとって、その非常に狭い範囲での生活の中で心を慰めたものの一つが自然風景、中でも山の風景であった。そして山は彼の求める自由や安らぎのイメージと結びついていて、イゼール川から山を眺め、自由に遊ぶ少年たちを見たことはスタンダールに自由を知らしめた。また父や伯母、家庭教師などの「圧制者」がいない空間の中で、祖父や妹と山の風景に感嘆しながら自由に楽しいひとときを過ごしたことや、友人ビジリオンと気ままに山を散策しながら自由を謳歌したことなど、スタンダールにとって故郷の山は彼の憎悪すべき幼少年時代の中で、数は少ないが幸福感と共に思い出される感情の舞台背景となっていた。山の風景が、グルノーブルでの閉塞的な生活の中で、彼に安らぎと開放感、そして自由を感じさせるものであったと言えるだろう。グルノーブルを脱出し、念願のパリに住むようになってからも、スタンダールはグルノーブルの山を求めていた。嫌悪する父からの解放、自由、そして夢の実現を可能にするはずであったパリでの生活だったが、実際のパリになじめず絶望していくその心に甦ったのはドフィネの山の風景だった。このように何度となく彼の心によみがえるグルノーブルの山。この風景はスタンダールの原風景となっていた。原風景は幼少期から少年時代に経験する情動体験の舞台となる特定の空間の風景である。それは過去を想起させるだけでなく、それにより安らぎを見いだせる風景である。スタンダールにとって山の風景は、彼が最も求めた自由と安らぎという情動体験と結び付いている原風景の一つであるといえる。スタンダールにとって山の風景は、幼い頃の単なる懐かしい風景にとどまる物ではなく、その回想により安らぎをもたらした。それは山の風景とともに味わった自由や安らぎという感覚、感情をも呼び起こすことで、パリの憂鬱な現実から逃避することを可能にした。

スタンダールが抱いた山に対する独自のイメージや解釈は、『赤と黒』で描かれる山の風景にも反映されていると言える。ジュリアンは度々レナール氏と対立し、侮辱されたと感じたり、自尊心を傷つけられとき、ヴェルジーからヴェリエールへと向かって山に入ることがある。山はジュリアンにとって誰からも邪魔されない隠れ家であり、そこで安心や自由を感じ、夢にふける。こうした姿は、少年時代のスタンダールが山の風景に感じた感情と記憶につながると言える。また山の風景を眺めながら、未来のパリで待ち受けている夢や希望に思いをめぐらせる姿もまた、少年時代に山を見つめていたスタンダールの姿そのものと言えるだろう。ここで描かれる山にはスタンダール自身の個人的なイメージの反映、つまり山の風景と夢想と自由、安心感との結合が見られるのである。また処刑される前、友人フーケに語った「懐かしいジュラの山の中で眠りたい」という願いは、故郷を離れてから常にグルノーブルの山を思い描いていたスタンダール自身の願望と読むこともできるだろう。『赤と黒』で描かれる山は、スタンダール自身にとってそうであったように、ジュリアンにとっても、人間から隔離され、守られた場であり、また自由と夢想を満喫できる場であった。

『赤と黒』の舞台は架空とされているが、山の風景に関して言うならば、この風景の描写には、スタンダール自身の山に対する感情や感性が反映されている。そしてジュリアンにとっての山の存在が、スタンダールにとっての山の存在と同様のイメージ

が与えられていることから推測するならば、『赤と黒』で描かれるヴェリエールとヴェルジーの間にそびえる山は、スタンダールの原風景としての山の風景が、その想像力の源となっていると言えるだろう。

スタンダールにとって山は非常に親密なものであり、その生涯に於いて最も愛したものの一つと考えることができるだろう。自由と安らぎをもたらす山の風景は、同時代人らが感じる畏怖や戦慄と言った感情とは真逆の感情を与えるものであったと言える。その意味に於いて、山は「崇高」な風景ではなかったと言えるだろう。

## 【書評】

### アントワーヌ・コンパニヨンの『反近代派』

片岡大右

1947年、モーリス・ブランショは「墓の彼方からのまなざし<sup>1</sup>」と題する論考を執筆し、ミシェル・レリスの自伝的著作を相手取りながら、近代文学の本質の解明という懸案の課題に迫ろうとする。レリスの企ては、そしてより一般に近代文学は、シャトーブリアンがその名高い回想録の標題に凝縮させていると見える経験、自らの死を通して語るというあの不可能性の経験をこそ本質とするというわけだろうか？ 答えはイエスであり、ノーでもある。ブランショは、論考の標題が暗示する作家の名を本文において実際に取り上げるのだが、それは『墓の彼方の回想』とその著者を断罪するため、この回想録は死の経験を本当には生きていないと切って捨てるためにほかならないのだった。『文学空間』の著者はこうして、この上なくシャトーブリアン的な主題を取り上げ、彼の代表作の標題を借用すらしながら、彼を見事な標題に相応しからぬ偽者、近代文学の真の課題を引き受ける振りをする僭越な輩として糾弾し、このような標題を掲げる資格を彼から剥奪することで、レリスやカフカ、マラルメといったお気に入りの文学者にこそ似合いの主題として、それを横領してしまう。シャトーブリアンをつまらぬ教科書作家として打ち捨てることによって、ブランショは文学における近代性の道を指し示そうと努めるのである。

そのような努力は無駄だったというのが、アントワーヌ・コンパニヨンの近著、『反

---

<sup>1</sup> Maurice Blanchot, « Regards d'outre-tombe », La part du feu, Gallimard, 1949.

近代派 ジョゼフ・ド・メーストルからロラン・バルトまで<sup>2</sup>』の基本的な主張であるように見える。無駄であった、というのも、彼が本書冒頭で宣言しているところによるなら、ブランシヨは バルザックやベールすなわちスタンダール、ボードレーやブールジェ、ベルナノス、ブルトン、バタイユ、そしてバルトといった、Bで始まる他の多くの近代フランス作家たちと同様 反近代派であり、大革命以後の主要な文学者によって構成されている、つまりはフランス近代文学史の王道をなしているということができるこの反近代の流れの最初の作家こそは、シャトーブリアンにほかならないのだから。シャトーブリアン研究の世界を覗きこむなら、『墓の彼方からの回想』の著者の文学的賭け金を、ブランシヨの参照によって説明し、権威付けようとする企てが時折目に入ってくる。ジャン=ピエール・リシャルがまさにそうしていたし、もっと最近のより大学的な諸研究から例を取るなら、アニェス・ヴェルレの研究が、上に引用した批判に脚注で言及しつつも、シャトーブリアンの死との関わりには、批評家本人の厳しい判決にもかかわらず、ブランシヨの名を正当に想起させる何かがあると訴えている<sup>3</sup>。シャトーブリアン、まったく読まれないわけではないにせよ、19世紀後半の幾人かの文学者ほどには今日の文学的感受性によって愛されてはいない、むしろ授業で読まされて嫌になる書き手の筆頭に掲げられるべきこの作家の中に、現代人の意識に訴えかけうるような利点を見出そうとすると、ブランシヨ的な文学体験を引き合いに出そうというのはたしかに自然な誘惑である。シャトーブリアンはブランシヨのように読むことができる……。しかし、コンパニヨンの『反近代派』が提案するのはその逆の筋道だ。ブランシヨが人を惹き付けるのは、彼がシャトーブリアンに始まる反近代の伝統に連なる感受性を表現しているからにほかならない……。

もっとも、序文の書き出しで引き合いに出しはするものの、コンパニヨンはその後、ブランシヨを反近代派として位置づけるべく言葉を連ねることはしていないし、むしろジュリアン・グラックにおける根強い近代への抵抗を跡付けるに際しては、グラックの敵視を被り続ける、近代的な文学観（肯定ではなく否定によって定義されるものとしての文学）の体现者として登場させている。前衛と近代性の名のもとに語られてきた文学史を反近代の系譜として読み替えようという本書の試みにおいて、これ見よがしに提示されるのは、ロラン・バルトの新しく、人を驚かしかねない肖像、反近代派としての肖像である。

大方のバルト読者にとって、ソルボンヌの教授によるこのようなバルト評価は、かつての前衛の守護神の文化的保守主義への回収と映るほかあるまい。しかし、幸か不幸か現在のフランスにおいて知的大衆は分化しており、バルトやブランシヨの読者はソルボンヌの教授の講釈に耳を傾ける気など鼻からないために、本書はそれを一読す

---

<sup>2</sup> Antoine Compagnon, *Les antimodernes, de Joseph de Maistre à Roland Barthes*, Gallimard, « Bibliothèque des idées », 2005. 以下、参照ページ数は本文中に記す。

<sup>3</sup> Agnès Verlet, *Les vanités de Chateaubriand*, Droz, 2001, p. 22.

るや反感を覚える類の人々にはあまり読まれないだろうし、修正主義をめぐる大論争を巻き起こすこともなさそうである。とはいえ、『レザンロキユプティブル』誌

若き intello-snob たちの雑誌であり、たしかにソルボンヌとの相性が良さそうには見えない の書評欄があえて本書を取り上げ、「ド・メーストルからロラン・バルトまで」という副題に込められた挑発を受けて立ちながら、バルトをソルボンヌから奪回すべく努力している。「アンチ・バルトによるバルト」と題されたこの書評によるなら<sup>4</sup>、このバルトの教え子は、引用の問題をめぐる 70 年代の著作では将来有望なところを見せていたにもかかわらず、「つねに不毛なあの文学史という大陸に上陸」してしまった。そうして、「歴史は、激しい断絶によって以上にはと言わずとも、アカ

デミスムの類や<sup>ポンピエ</sup>;つまらぬ作家たちによってもまた同様に形作られている」という思想に取りつかれ、さらには「マルク・フュマロリに忠誠を誓うべく いつの日かコレージュ・ド・フランスに入ろうという希望をおそらくは胸に 次第次第にロラン・バルトを否認」していった挙句、「文学が真に偉大で重要とみなしているものは当然に反近代派であり、しかもそれは、人を欺きかねない外観にもかかわらずそうなのだ」という本書の主張に達したというわけである。もちろん、この書評者にとっては、本書の企てこそが「偽りの一貫性」をもっともらしく拵えたものにほかならない。バルトが反近代派だって!? 「それは、バルトが一貫して、ひとつの新しい文学 当初は『白い』文学と称され、やがて日本の俳句、ジョイス的エピファニー、そしてカメラのシャッターの庇護の下に置かれることとなった、新しい文学というファンタスムに取りつかれていたのを忘れることだ。」つまるところ本書は、『失われた時を求めて』の物語を彩る多くは魅力的な登場人物の中から、よりもよってブリショ、あの退屈極まりない博識家に自己同一化する類の男によって書かれているのだ...  
...

あまり品のよい口調で書かれてはいないが、しかしむしろそれゆえにこそ、今日の講壇批評と一般読者との間に横たわる距離の証言としては有益なものだろう<sup>5</sup>。それにしても、文学史の営みの総体がつねに ingrat と決め付けられていることには目を瞑るとしても、ここで反論の根拠として挙げられているバルトの新しさへのファンタスムなるものが、コンパニオンによっても見過ごされてなどいないことは確認しておくべきである。とりわけ「日本の俳句」については、コンパニオンは本書で多くの言

<sup>4</sup> Bernard Comment, « Barthes par antiBarthes », in *Les inrockuptibles*, n° 489, 2005, p. 74.

<sup>5</sup> コンパニオン自身、『文芸の第三共和政』序文で、このような距離についてイギリスの状況と比較しつつ語っている。「ロンドンにはいまなお、ただひとつの知的大衆しか存在しない サント=ブーヴ、テーヌ、ブリュヌティエールが、大学人と読書家に同時に語りかけていたように。そして彼らがフランスでは最後だった(ロラン・バルトが現れるまでは、とっておくべきだろう、彼はこの点でもまた彼らのもとに立ち返り、二つの大衆を和解させたのだ[.....])」( *La Troisième République des lettres, de Flaubert à Proust*, Seuil, 1983, p. 16 )。『反近代派』の著者には、そのような分断を修復しようという気はなさそうである。

葉を費やしている<sup>6</sup>。バルトは最晩年のコレージュ・ド・フランス講義『小説の準備』において俳句に繰り返し言及し、『明るい部屋』でも詳細に論じられた写真の美学と比較しつつ、この日本の独自の短詩形式は「精神的なシャッター、サトリ」によって産み出されるものであり、論理的な連関を欠いたイメージの並置によって、あらゆる解釈を拒む「ひとつの精神的な『それだ！』<sup>7</sup>」を提示するものであると結論付けている。バルトは俳句のうちに、彼がやはり晩年の講義で展開した「中性的なもの」の見事な具現化を見ていたわけだが、コンパニオンによるなら、この中性的なものこそが反近代の本質である。どうということだろうか？

バルトが50年代においては史的唯物論の信奉者であり、ブレヒト的立場から、当時の前衛演劇（ベケット、アダモフ、イヨネスコ、そしてジャン＝ルイ・バローの演出……）におけるブルジョワ階級との馴れ合い、政治的賭け金の喪失を鋭く批判していたことを、『反近代派』の著者は事細かに紹介する。そして、「もっと穏健なバルトに親しんでいる諸世代を戸惑わせかねない」（426）この戦闘的なマルクス主義批評家のイメージを楽しげに筋金入りの反近代派が纏ったほんの一時の衣装として

提示した後に、コンパニオンは、ここに見て取るべきは、「マルクス主義の用語でたやすく正当化された」（419）前衛への抵抗、つまり政治的リアリズムを盾に取っての反近代的な身振りにほかならないと主張する。前衛における言語への破壊行為を、この古典文学の愛好者は許せない。この点で彼は、当時論戦を交えたジャン・ポーラン、この熱心な反共産主義者が『タルブの花』で展開した、前衛における言語へのテロルの告発というモチーフを完全に共有していたのである。「双方がヒューマニストであり、反近代派であった」（431）。そして前衛的テロルへのこの告発は、「新しい世界、新しい共通の言語」（423）へのブレヒト的希望を伴っていたのであり、後にバルトが発することになる、「言語とはファシストである」との名高い定式（1977年）もまた、言語の破壊という前衛の冒険を導き出すどころか、抑圧的性質から言語を救出しうる唯一の手段としての文学への夢につながっていた（432）。「いかにして言語の権力を中性化し、それを愛の対象にできるのか、いかにして言語と『戦い』、『その独断的本性を解体』できるのか。この課題は『中性的なもの』についての講義で果たされることになる。革命によってでもなく、暴力によってでもなく、愛撫によって」（同）。言語を純粹化するのではなく、それを慈しみ、撫で擦り、優しく手入れすること。こうして、一時的なものにすぎなかった政治への関わりからは撤退する一方、バルトは権力関係の地獄から逃れたものと見える中性的なものへの権利を手に入れたのである。そして、続く講義『小説の準備』のバルトは、タイトルを裏切り、この

---

<sup>6</sup> それに、そもそも龍安寺の石庭の写真をコンピュータのデスクトップ画像にしている彼に、そのような感覚が理解できないとは思えない。Voir « Antoine Compagnon, la genèse de la modernité », propos recueillis par Pierre-Marc Biasi, in *Magazine littéraire*, n° 440, mars 2005, p. 94.

<sup>7</sup> Roland Barthes, *La préparation du roman I et II, cours et séminaires au Collège de France (1978-1979 et 1979-1980)*, Seuil, 2003, p. 121.

中性的なものの特権的な化身として詩形式を、とりわけその極限形態ともいいうる俳句を讃えることになるだろう……。

中性的なものの反近代性、あるいは反動性を証しだてるべく、コンパニオンはバルトがマルクス主義の熱狂から醒めた直後、そして構造主義というもう一つの熱狂へと飛び込んでいく直前の時期に書き付けた言葉を引用する。「我々はひとつの時期から、政治参加の文学という一時期から抜け出ようとしている。サルトル的小説の終わり、社会主義小説の揺るぎなき貧弱さ、政治演劇の欠陥、これらすべてが、引いて行く波のようにして、ある特異な対象、際立った耐性を持つ対象を明るみに曝け出す 文学という対象を」(434)。政治参加と美的純粋主義との絶えざる交替という文学の運命を思いつつ、バルトは同時期の別の論考で次のように書く。「文学とは成り立ちからして反動的なものだ」(同) コンパニオンに言わせるなら、「見たところは憤慨した様子もなく」(同)。こうして、『レザンロキュプティール』誌の反論にも関わらず、バルトが晩年に写真や俳句に託して語った美学こそが、彼の反近代性の証しだということになるのである。驚くべき議論だろうか？ 文学における政治参加の時期の終わりを、「バルトの徴のもとに<sup>8</sup>」置いて論ずる類の議論はすでにあるのだし、それほどのことでもないように思うのだが。とはいえ、著者を「アンチバルト」と名指すバルト読者の存在は、ちょうど四半世紀前に没したこの批評家がいまだ十分に神話化されていることの雄弁な証言であり、そのような神話を覆して見せようというのが、本書の主要な賭け金のひとつであることは疑いないだろう。

しかし、もちろんそれは著者の賭け金のひとつにすぎない。最終章をバルトに捧げ、彼をめぐる神話を解体することによって自身の議論を補強しつつ、コンパニオンは、近代フランス文学の総体を反近代の名のもとに語り直そうとする。第二部「人物」において、反近代派の系譜の中からそれほど知られていない(ラコルデル)、とりわけ複雑な(バンダ)、あるいは意外な(グラック、バルト)顔ぶれを論じるに先立ち、「観念」と題された第一部は、反近代を定義づけうる諸特徴を六つに分けて扱っている。反近代派は、歴史的にいうなら「反革命」の立場に立ち、哲学的見地からは「反啓蒙」であり、道徳的には「ペシニスム」を採用、宗教的には「原罪」を人間の根本に置き、美学的には美よりも「崇高」を好み、文体的にはおおむね、「罵詈雑言」によって特徴付けられるというわけだ。ここには必ずしも、万人を驚かす類の主張が展開されているわけではない。バルザックが、フローベールが、ボードレーが民主主義を唾棄していたことなら、誰もが心得ているからである。もっとも400ページを超える大冊を通して改めて詳説されると、眩暈にも似たある種の感銘を覚えることも確かではあるが。そして、本書の眼目は、これらの作家たちが政治的な反動性にも関わらず、ではなく、まさにそれゆえに偉大な芸術家だったことを解き明かす点にある。ブルジョワ社会への唾棄は崇高なものへの思いにつながるのだし、意に満たない現実

---

<sup>8</sup> Voir Benoît Denis, *Littérature et engagement*, Seuil, coll. « Points Essais », 2000.

は、抑えがたい罵詈雑言を作品として産み出すことを促す<sup>9</sup>。反近代派のペシミスティックな世界観（ニーチェの「アモール・ファティ」;運命愛」）こそが彼らの芸術の美的な達成の源となっている点については、第一部最終章（「罵詈雑言」）のみならず全体の結論でも論じられており、本書の主要なメッセージと見ることができる。しかしこの点についての著者の議論は、人を戸惑わせかねないものである。「ペシニスム」の章では、ペシニスムが彼らが無為に導くどころか　そのような状況に導くのは、むしろ進歩への信頼のほうである　「絶望のエネルギー」(64) バルトがパゾリーニについて述べた「絶望の活力」(同)をもたらしことが主張され、反近代派の道徳的意義についてそれなりの言葉が費やされていた。しかし、第一部の結論的性格を持つ「罵詈雑言」の章で提示されるのは、これまでの章において仮借ない近代批判者、沈鬱で激烈な預言者として描かれていたド・メーストルの、別の側面である。ラマルティーヌによるなら、ド・メーストルは実生活ではむしろ陽気で、冗談好きの男であり、「そのことが詩人を、ド・メーストルの主張をあまり真に受けないほうがよいという気にさせた」(146)。彼は何よりも読者に受けることを考えており、そのため現実の不幸な表象を大いに利用していたというわけである。反近代派のヴィジョンの美学的利点をめぐる同様の主張は、「魅惑の反動たち」と題された本書の結論、それも二節に分かれているうちの最終節である「負けるが勝ち」においても展開されている。理想の世界の実現が絶対的に不可能であるという運命を受け入れることは、反近代派の文学に途方もない富を、悲嘆や憂愁、絶望を思う様に表現するという得がたい恩恵をもたらすというのである。「反近代派にとって、最悪の政治はしばしば、願ってもない幸運である。〔……〕反近代派は負けるが勝ちの勝負をする、というのも憂愁の経験は、彼に難攻不落の修辞学的砦をもたらすのだから。世界における失敗は、文学の企てを限りもなく追及することを可能にする条件なのである」(445)。『フィガロ・リテレール』の書評者が「反近代の伝統を、近代の美的なはげ口にすぎないものへと還元してしまうピルエット」;はぐらかし<sup>10</sup>」として失望してみせるのも無理はない。文学とは、もう少しまじめなものではないだろうか？　というわけである。

本書におけるこうしたまじめさの欠如は、多くの読者を幾分かっかりさせかねないものであるはずだが、文化における「精神の要請」の擁護者として知られるあのマルク・フュマロリは、『ル・モンド・デ・リーヴル』に掲載された本書の書評において、そうした点を咎めたてることがはしていない。それどころか、バルトを自分にも理解可

---

<sup>9</sup>罵詈雑言はしかし、コンパニオンが扱うすべての反近代派たちに共通の文体的特徴だろうか？　ありうべき問いに、著者は予め答えている。「グラックとバルトは確かに、あまり罵詈雑言家とは言えない。彼らの世界に対する怒りは　というのも彼らもやはり怒れる人間なのだから　抑制され、洗練されたものになっている」(443) といった具合だ。

<sup>10</sup> Paul-François Paoli, « Faut-il être antimoderne ? », in *Le Figaro littéraire*, jeudi 7 avril 2005, p. 4.

能な存在にしてくれた、このかつての弟子の労作を絶賛している。本書に深く納得したフュマロリにとり、『レザンロキュプティール』の書評者とは反対に、コンパニオンはひとりのアンチバルトであるどころか「バルトの忠実な継承者<sup>11</sup>」である。彼はバルトの公的なイメージに惑わされることなく本質を理解し、かつての論争相手であるレーモン・ピカールがあので快く読めるだろう本を書いてくれたのだから。

フュマロリの名前が出たところで、本書における政治的賭け金と見えるものに触れてこの論を終えることにしよう。かつて『文化国家』をレーモン・アロンに捧げ、2003年のシャトブリアン論をポール・ベニシューに捧げた彼にとって、本書はたんに芸術における前衛の価値を低く見積もっているだけの書物には映らない。『反近代派』は、芸術上の前衛と結びついた左翼の政治的冒険を、否定しないまでもいわば無効化している点においていっそう、彼を喜ばせるのである。フュマロリは、具体的な政治的論争が論じられるわけではないバルトの『小説の準備』を、ジッドのソ連への絶望になぞらえ、「彼にとっての『ソ連からの帰還』」と呼ぶことすら憚らないのだ。さて、このような解釈は、必ずしもフュマロリの深読みというわけではなさそうである。実際、本書における反近代派の極めて形式的な定義「近代の宿命を受け入れつつ、それを盲信しない者」からするならば、政治的な左右を問わず、ほとんどの文学者がそこには含まれることになってしまうだろうが「馬鹿以外の全員が、と言いたいところだ」、コンパニオンが一方で強調しているのは、ユゴーよりボードレー、ゾラよりフローベール、等々、政治的反動に属する作家のほうが、後世において高く評価されるという成り行きである(11)。戦闘的左翼の立場から前衛芸術における政治的賭け金の喪失を批判するといえ、ひとは一般にバルトよりもサルトルを想起する。前衛を批判するサルトルは反近代派なのだろうか？ コンパニオンの図式からするとそうなるもおかしくないが、彼はサルトルを扱うのを好まないだろう。バルトは右翼にならないまでも脱政治化した、サルトルは一貫して左翼であり続けたからである。本書は図式的とは言わずとも極めて形式的な議論を展開する一方(「見事な例」、「範例」といった表現が繰り返し現れる)、形式性を離れた別の意図によっても構成されており、要するに、政治的右翼による、左翼からの文化的価値の奪回の企てという側面をも持ち合わせている。実際、結論において著者は、反近代派を若き日の熱狂から醒めた近代派のようなものと述べ、今日の合州国と世界に暗い影を投げかけて

いるあの<sup>ネオコン</sup>新保守主義者たち(アーヴィング・クリストルを初めとする多くは元左翼活動家である)に、そしてまたフランスにおける「新しい反動たち」(ゴーシェ、ロザンヴァロン等)になぞらえている。極右というべきネオコンはともかく、左派勢力の中道への回収を主要な関心事とするフランスの「新しい反動たち」の流れに、本書が掉さしていることは確かだろう。だがこの試み 19世紀の反動的文学者たち

---

<sup>11</sup> Marc Fumaroli, « Antoine Compagnon, la modernité, ses adversaires et ses repentis », in *Le Monde des livres*, vendredi 25 mars 2005, p. 4.



を、今日の「新しい反動たち」と連携させることは、一見すると大きな矛盾を抱えているように見える。フローベールやボードレーが、社会主義への憎悪もさることながら議会制民主主義と普通選挙への侮蔑を示していたのに対し、「新しい反動たち」にとっての問題は、左右の全体主義を告発しつつ、唯一許容できる政治体制としての議会制民主主義を擁護することだからである。しかし、本書はこの一見しての矛盾を解決しているか、少なくとも取り繕うことには成功しているようだ。その秘訣は、本書がコンスタンを退け、トクヴィルを選んでいることにあると見てよい。両者は今日のフランスにおける自由主義の再評価においてともに復権しているわけだが、コンスタンの政治理論がおおむね、今日常識化している議会制民主主義の諸前提を定式化しているものであるのに対し、トクヴィルの近代観はよりニュアンスに富んだものである。『アメリカにおける民主政』の著者は、一方で民主政の実現を讃えつつ、平等化の進展が社会に及ぼす危険性をも指摘してやまない。つまりは反近代派であり、しかもフローベールらと異なり、近代化の進展を歴史の必然としてしぶしぶ受け入れるのではなく、進んでその原理を讃える点で、完璧な近代派でもある。本書はこうして、ド・メーストルのごとき紛れもない反動を縦横に活躍させる一方、要所要所でトクヴィルを後ろ盾にしながら、反近代派を「自由」の理念と結びつけることによって<sup>12</sup>、19世紀以来の反動的な文学者たち「魅惑の反動たち」を、今日支配的な政治的ディスコースと和解させようとしているのである。近代文学のトクヴィル的総合だろうか？ かつてやはりバルトの弟子として出発し、やはり中道の理念の擁護者へと転身したトドロフは、今日コンスタンを選ぶことにより、文学研究者の相貌をほとんど失っている。一方、トドロフがコンスタンと比べての保守性を指摘するトクヴィルを選ぶことにより、コンパニオンは近代フランス文学の豊かな富を、欲しいままに味わっているのである。バルトが書いていたように、文学とはやはり、本性からして反動的なものなのだろうか？ いずれにせよ、本書が様々な問いに開かれた、見事に書き上げられた作品であることは間違いない。本書はその価値に相応しい議論を呼ぶだろうか？ すでに述べたように、おそらくはそうならないのが残念なところだ。

---

<sup>12</sup> 「反近代派とは自由における近代人である」（14）、「反近代派とは近代人の自由であり、近代人プラス自由である」（447）、等々。

## 【コロック報告】

### Henri Beyle, un écrivain méconnu

(2004年11月19日～20日 於 パリ第12大学)

(編者注：このコロックに関しては、小林亜美さんと羽成優さんのおふたりが報告をお寄せくださいました。以下に続けて掲載いたします。)

2004年11月19日～20日にパリ12大学で開催されましたコロック« Henri Beyle, un écrivain méconnu (1797 -1814) »に参加しましたので、私が聴講した部を中心に、簡単な報告をさせていただきます。

19日には、午前中に Esthétique の部があり、午後からは二つの教室に分かれて、Journal と Philosophie et idéologie の部がありました。

Esthétique の部では、『イタリア絵画史』が主にとりあげられておりましたが、同時に、1800~1810年の「ポーリーヌへの手紙」には“芸術”への言及が多々見られるという指摘(Mme Chabanne)をはじめとする、「ポーリーヌへの手紙」への言及も多かったように思います。

午後からの Philosophie et idéologie の部では、精神科医 Pinel の著書へのスタンダールの反応の分析(Mme Corredor)や、『エゴチスムの回想』などのやや後期の作品をとりあげつつ、rétrospectif なスタンダールの態度と自己認識をめぐる議論(M. Sangsue)などが繰り広げられました。

なお、この日は全発表終了後に、大学図書館で、スタンダール展 «Henri Beyle à la conquête de Stendhal»の開会式も行われました。さほど大掛かりな展覧会というわけでもないようですが、スタンダールゆかりの絵画、版画(のコピー)や手稿、書籍などが展示されており、12月18日まで開催されるとのことでした。

20日は、午前中に Histoire と Théâtre の二つの部があり、午後は Avant le roman の部がありました。

Histoire の部でも、「ポーリーヌへの手紙」への言及が多く見受けられました。「ポーリーヌへの手紙」を、le témoin oculaire の立場から書かれた historiographique な手紙であると同時に éducatif な要素を持った手紙であるとする論(M. Bourdenet)、従軍期(1806-1807頃)の、日常的な事柄への言及の多い、女性との文通という性格が強いと同時に文学的でもある手紙に着目した論(Mme Guinoiseau)など種々の論が交わされ、議論も活発に繰り広げられました。なお、Didier 先生は発表の題目をプログラム記載のもの(« Des Vies de Mozart, de Haydn et de Métaastase à l'Histoire de la peinture en Italie : continuité ou rupture ? »)から «Une peinture tendre : la musique apres L'Histoire de la peinture en Italie »と変更され、HPI における音楽への言及の多さ及び音楽と絵画との平衡関係、諸芸術に対する音楽の優位性をめぐる議論を展開されました。

午後の Avant le roman の部では、小説と実体験との間の混乱、語りの修練として

のジャーナリズム、ダリュ夫人への愛着から生まれたロマンティックなエクリチュール、などの変遷の後“小説”に至る過程の分析(Mme Mariette Clot)などが話題になりました。

最後に、Crouzet 先生の、「スタンダールの美学、réalité とは何か」をめぐる発表があり、スタンダールにおける le mal du siècle の否認、またスタール夫人的な tristesse につながる mélancolie の否定に触れられ、スタンダールにおいては mélancolie とは amour と結びつくものであり、さらには自己との和解に結びつくものであると指摘されました。そして、Etre libre devant la réalité というスタンダールの概念に触れられたのですが、残念ながらお話を終えられる前に時間切れとなり、結論まで拝聴することはできませんでした。

«Beyle avant Stendhal»をテーマとした今回のコロックでは、“小説以前のスタンダール”の様々な側面を様々な角度から垣間見ることができたように思います。発表の中では小説との関連についての明確な言及はほとんどなかったものの、そうした関連性についても考えさせられました。(小林亜美 記)

今回のコロックはパリ郊外のクレティユ大学での開催だったにもかかわらず、多数の発表者・聴講者に恵まれ、内外研究者の関心の高さを感じさせる学会となった。発表者のテーマは美学・日記・哲学・観念学・歴史・演劇・小説とさまざまな分野に分かれたが、1814年以前の著作とそれ以後のスタンダールの小説との間に共通項を見出し、かなり早い時期から登場人物の源泉や小説理論の芽生えが見られる、という指摘は当然のことながら多かった。

例えば、1800-1814年の日記からロマネスクなものを読みとろうとする Catherine Mariette-Clot や、『イタリア絵画史』の記述「死に近接した崇高な人物」は後の『赤と黒』のジュリアンを思わせると述べた Marie-Pierre Chabanne の発表などがそうである。他にも、Serge Linkès はシャトーブリアン、スタール夫人、エルヴェシウス、カイヤヴァからアンリ・ベールがくみ取った詩学・演劇理論の小説への影響を検討し、『ルテリエ』の主人公と『ラミエル』におけるサンファンとの類似を指摘した。また Jean-Jacques Hamm も『セルムール』の第4幕の詳細な性格分析から「崇高さ」と「グロテスクなもの」の混在したロマン派演劇理論を引き出し、スタンダールの登場人物の性格がすでに形成されていると結論づけた。Francesco Spandri は、小説においてオクターヴがアルセストに、ジュリアンがタルチュフに重ね合わせられることに着目し、モリエールの登場人物は喜劇的なものではなく、むしろ悲劇的なものに結び付けられ、アンリ・ベールが «Molière tragique» を目指していたことを指摘した。Suzel Esquier は、ルニヤールの戯曲自体を丁寧に分析し、アンリ・ベールにおいて対比的にとらえられているモリエールの喜劇性 le comique とルニヤールの冗談 la plaisanterie の違いを明らかにした。Michel Crouzet はシャトーブリアン『ルネ』に対するスタンダールの態度を読み解きながら、参加者の発表の総括もふまえて美学的な理論(スタンダールの作品は自然をありのままに描写する模倣理論に基づくものではなく、代替

物の置き換えによって情熱を再現する芸術である)へ結論を進めようとしたが、残念ながら時間切れとなり、学会は終了した。

1814年以前に書かれたものについてはまだまだ研究の余地が残っており、今回の学会でもまとまった結論のようなものは出なかったが、絵画批評に関する研究が徐々に増えている印象を持った。2005年5月にパリ第3大学で開かれる『イタリア絵画史』についてのコロククにも期待したい。

また、Kajsa Andersonの発表中に紹介されたスウェーデン学会(2002年)の論文集(2巻本)は以下の通り。

*L'image du Nord chez Stendhal et les Romantiques*, textes réunis par Kajsa Anderson, 25-27 avril 2002, Örebro University, Humanistica Örebroensia, Artes et linguae, nr. 10, 11, Örebro university University Library, 04/2004.

<http://www.ub.oru.se> (Örebro University のサイト)

(羽成優 記)

## 【セミナー報告】

### Séminaire Stendhal 2004-2005 : Stendhal et la question du genre

羽成 優

さまざまな文学ジャンルで創作活動を試みたスタンダールに関して、各ジャンルの間にある共通点を比較検討し、一人の作家の姿を浮かび上がらせるという手法は、2004年11月のコロックでも見られたものの、すでに著名な研究者によって言及されつくした、という印象がある。こうした見解は若手研究者の間ではとくに顕著で、スタンダール・ゼミの2004-2005年度の主題は *Stendhal et la question du genre* となった。ゼミの中心メンバーの一人、Xavier Bourdenet は初回の導入発表の際に、Gérard Genette の *Figures II* や Michel Crouzet の最新著書 *Stendhal en tout genre. Essais sur la poétique du Moi*, Paris, Champion, 2004 を引き、これまでのスタンダール研究においてジャンルの概念が厳密に検討されず、各々のジャンルの自立性が尊重されてこなかった点、小説作品ばかりが作家の最終目的としてとらえられたきた点に難色を示した。これに対し、ジャンルに関するスタンダールの考察を引きだすための生成研究や、文学ジャンルの歴史的側面についての同時代研究・社会批評研究の余地がある、というのが彼の立場である。その他、演劇ジャンルの『赤と黒』への応用 (Agathe Lechevalier)、1824年の『サロン』批評における絵画のジャンルの問題 (François Kerlouégan)、伝記、小説、歴史書、演劇、旅行記などとそれぞれに類縁性をもつジャンルである回想録とスタンダールの関連 (François Pichot)、スタンダール各作品の冒頭 (Préface, Avertissement, Avant-propos) に見られるジャンルの認識について (Marie Parmentier) などの発表が行なわれている。とくに、スタンダールの小説の主要なテーマ (牢獄、変装、駆け引き) の多くが回想録に源泉を得ているというフランソワ・ピシヨの指摘は当然のことながら、それらを回想録ジャンルに固有の性質と結びつけた分析は興味ぶかいものがあった。また、スタンダールが無意識にジャンルの枠組みを乗り越えているのではない、とナラトロジーの理論を用いながら分析したマリ・パルマンティエの発表も、今後の発展を感じさせるすぐれた発表だったと思う。

詳しくは、プレイアド版の改訂にともなってスタンダール特集が組まれたマガジン・リテレール 4月号 no.441 をご覧ください (Xavier Bourdenet, « Les nouvelles recherches », p.65.)。なお、来年度は『ローマ散歩』についてのゼミになる予定です。

【会員活動報告】2004年4月1日～2005年3月31日

小野 潮

「シャトーブリアンの見た一七九二年のパリ 『墓の彼方からの回想』第九巻第一章～第六章」(翻訳)、『仏語仏文学研究』第37号、中央大学仏語仏文学研究会、2005年3月10日、p.213-260.

片岡 大右

「シャトーブリアンと古典主義詩学:ミメシス、カタルシス、そしてキリスト教」、『仏語仏文学研究』第29号、2004年5月31日、p.55-77.

近藤 朱蔵

ロバート・ダーントン 『禁じられたベストセラー - 革命前のフランス人は何を読んでいたか』(翻訳) 新曜社 2005年2月

杉本 圭子

« Shakespeare contre Barrême : l'enjeu de la fiction dans les *Mémoires d'un touriste* » dans *L'Année stendhalienne*, numéro 3, 2004, pp.161-184.

高木 信宏

「『赤と黒』における<聖堂> - 第1部・第18章の制作をめぐって」、『ステラ』第23号、九州大学フランス語フランス文学研究会編、2004年12月、p.19-49.

富永明夫

「恋・スタンダール・モーツァルト」モーツァルト劇場 2004年10月公演 モーツァルト作曲 『愛の女庭師』(K196) 公演プログラム、p.7.

羽成 優

« De la cloche à l'orchestre : la place de l'instrument de musique dans les œuvres stendhaliennes » 『慶應義塾大学フランス文学研究室紀要』第9号、2004、p.33-48.

南玲子

「これは小説などではない - 『イタリア年代記』三短編に見る、スタンダールの人間研究の行方」、『Résonances (レゾナンス)』第3号、東京大学大学院総合文化研究科フランス語系学生論文集、2005年4月、p.61-67.

山本 明美

« La Renaissance dans le cloître : manuscrits italiens et création stendhalienne (une

hypothèse onomastique )» in *Liberté orageuse, Balzac-Stendhal, Moyen Âge, Renaissance, Réforme*, actes du colloque international, Tours, 27-28 juin 2003, textes réunis par Michel Arrous, Florence Boussard et Nicolas Boussard, Eurédit, juillet 2004, pp.303-312.

## 編集後記

プレイヤッド新版 *Œuvres romanesques complètes* の刊行が開始され、*Magazine littéraire* のスタンダール特集号も出て、スタンダール研究者にとってはにぎやかな春となりました。フランスでもさまざまな関連行事が行われており、その一端を留学中の羽成優さんと小林亜美さんが伝えて下さいました。また、同じく留学中の片岡大右さんには、いまや保守派の論客として知られるアントワーヌ・コンパニオン氏(パリ第4大学)の近著、*Les Antimodernes, de Maistre à Roland Barthes* (Gallimard, 2005) についての長文の書評を頂きました。本書におけるスタンダールへの言及はそれほど多くはありませんが、シャトーブリヤンからボードレール、フロベールに至る「反近代派」の流れの中で、ロマン主義の擁護者として華々しく登場しながら、自由主義、民主主義の理念への共感から早々にユゴーら王党主義者たちと袂を分かったスタンダールの特異な立場を検証しなおすうえで、非常に示唆に富む本であることは間違いなさそうです。

\*

さきごろ、スタンダール研究会専用のメーリングリスト (ML) を構築いたしました。現時点でメールアドレスを頂いている会員の方々をメンバーとして登録させていただいております。なお、アドレスは外部には非公開としております。メンバーの方は

stakenjp@yahogroups.co.jp

のアドレスにメールを送信いただきますと、参加者全員にメールを送ることができます。会員同士の意見や情報の交換、転居のお知らせなどにお役立て下さい。また、新たにメールアドレスを取得され、メーリングリストへの参加をご希望の方は、杉本までご一報ください (cypresdujapon@mpd.biglobe.ne.jp)。

\*

最後に、2004年11月24日、かねてご闘病中でおられた松木繁先生が享年68歳にて逝去されました。松木先生には頻りに研究会に足を運んでいただき、また後進の私たちに対しても常に暖かいご配慮をいただいております。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(杉本 記)